

みなとの新しい動き

①横浜のロフト文化の可能性

ヨコハマ・フラッシュ
をとおして考える

野田邦弘

一——この小論のねらい

横浜の都市イメージとして「みなと」というのはどうしても落とすわけにはいかない。国際文化都市を目指すまちづくりにとって、「みなと」あるいは「ウォーターフロント」は切り札である。

昨年十二月、新山下町に誕生した「ヨコハマベイサイドクラブ」は、倉庫を改造したブルバードとデイスコだが、アクセスが悪いにもかか

わらず連日若い客でごったがえしている。ちなみに客の半数位は東京方面から来ているという。このようにハマのロフトは実は東京以上に巨大なパワーを潜在させているのだ。

YES'89ヨコハマ・フラッシュというイベントを開いた経験から、いわゆるロフト文化といわれる新しいトレンドについて分析するとともに、横浜独自の魅力あるまちづくりのためにロフト文化の視点を導入することを提案したい。

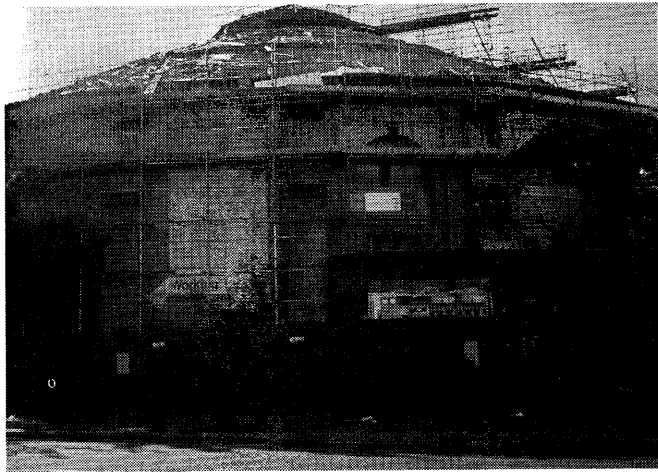
①横浜のロフト文化の可能性

- ② 京浜工業地帯の変化
- ③ 新浦島ハイテクビル（仮称）建設事業について
- ④ 金沢木材港のマリーナ計画
- ⑤ 八景島の整備について
- ⑥ みなと色彩計画

二——ロフト文化の源流——海外の事例

- 一——この小論のねらい
- 二——ロフト文化の源流——海外の事例
- 三——わが国でのロフトの動き
- 四——横浜でのロフトの動き
- 五——ヨコハマ・フラッシュ準備段階
- 六——ヨコハマ・フラッシュオープン
- 七——ヨコハマ・フラッシュの反響
- 八——ロフト文化の未来

ロフトとは倉庫、建物の最上階部分（屋根裏の場合もある）の意味で、形式にとられない若いアーティストたちが、ロフトをアトリエにして創作活動を行うのが流行し、ロフト文化と呼ばれるようになる。そして、ロフトが新しい芸術のムーブメントの拠点となり、社会的にも注目されるに至る。ここで、海外、国内でのロフトの事例を少しみてみよう。



①—ラウンドハウス

ロンドンの中心から地下鉄で二十分程の郊外にある文字通り円型の建物。約百四十年前、機関車の車庫として建てられたが、その後倉庫に転用されたりした。六十年代ロックコンサート会場として使用されはじめ、多くのコンサートが開かれた。一九七八年改修工事を行い、円形劇場として再生された。本来の目的では使用されなくなった建物を別の目的で再利用する場合、その場所を「オールタナティブスペース」と呼

ぶとすると（ロフトもこれに含まれる）、このラウンドハウスが、ヨーロッパにおけるオールタナティブスペースのヨーロッパでの先駆けと聞いている。

②—PS1

マンハッタンから地下鉄でひと駅という位置にあるPS1は、もともとニューヨーク市立第一小学校（Public School 1）だったが、一九六三年廃校となり、ビクトリア調の赤レンガの建物は見捨てられたままとなった。これに着目したアラナ・ハイス女史は、ここを美術家の制作アトリエ兼展示ギャラリーとしようと考えた。ニューヨーク市当局との長い交渉の末やっと、一九七六年PS1（Project Studio 1）として開館した。

彼女が作った「芸術と都市資源のための財団」がニューヨーク市からPS1の建物を賃借し、アーティストに個々のスペース（もと教室）をレンタルする。さらにアーティストインレジデンスという制度を採用した。これは、海外の若手アーティストを一年単位で受け入れて、滞在制作を行うというシステムで、世界各国からアーティストが来ている。

③—その他

パリのオルセー美術館は旧国鉄の駅舎を改築したものだし、同じくパリのヴィレット公園内にあるグランホールは、食肉市場を現在はギャラリー兼展示場として使用している。この他にも多くの事例がある。

三——わが国でのロフトの動き

欧米の先端的現象としてのロフト文化は日本にも移入され、80年代初頭頃から東京でも活況を呈するようになる。ウォーターフロント系ロフトとしては、インクステイック芝浦ファクトリー（コンサート会場）、タンゴ（スペイン風レストランバー）、鈴江倉庫（ラジオ放送局スタジオ、ギャラリー等）、ベニサンピット（劇場）等で、非ウォーターフロント系ロフトとしては、六本木ハートランド（ライブ・ギャラリービアレ스토랑）、恵比寿ビアーステーションとファクトリー（ビアレ스토랑とパフォーマンススペース）などがある。

しかしなんといってもアートの分野で注目を集めたのが、中央区新川、隅田川に面した三菱倉庫の一角に一九八二年から五年間ロフトギャラリーの活動を継続させたギャラリー上田ウェアハウスと、ここから目と鼻の先、永代橋近くに残る旧食糧取引所ビルの一部を借りて、ギャ

ラリー、パフォーマンスゾーンとしている佐賀町エキジビットスペースだろう。

この両者に共通する点は、既成の美術館や画廊のハード（スペース）、ソフト（システム）にあき足らない、あるいはそこからはみ出してしまふ表現を積極的に評価し受け入れてきたという点だろう。現代芸術の特徴の一つは演劇、美術、音楽、映画等といった既成のジャンル分けの有効性が次第にうすれ、超ジャンル現象、ジャンルの越境ともいべき現象で、アートのニューウェーブがそのインタージャンルの領域から多く発生してきているという点にある。ギャラリー上田ウエアハウスと佐賀町エキジビットスペースはこのアートのニューウェーブをいち早くキャッチし、それを具体化したものとして高く評価されるべきものである。

四——横浜でのロフトの動き

当然ながら、横浜にもロフトを作る動きはあった。むごん劇かんぱにい（野毛大道芸ふえすていばるなどを開催）の橋本隆雄氏は、ニューヨーク帰りのジャズマン尾山修氏（サククスプレーヤー。中区に提案したプランが後に本牧ジャズ祭として結実）などから、ニューヨークのソーホーの実情について聞かされ、横浜にソー

ホーを作ろうと活動を開始する。ターゲットは、新港埠頭内の鈴江倉庫。鈴江サイドとは話がスムーズに進み、借り手も少しずつ出始めたが、行政サイドの許可が下りず、このプランは時期尚早のため頓挫する。橋本氏はこの活動から身を引くことになるが、彼をアシストしてきた一宮均氏が活動を継承し、「赤れんが倉庫をアートセンターに」というスローガンを唱えてYPW（ヨコハマプロジェクトウエアハウス）を組織して、関係各方面に働きかけた。一方、海岸通りの三菱倉庫に対してもアプローチしており、ヨコハマフラッシュのきつかけはここで作られた。このように横浜でもロフトを作る動きが既にあつたことは忘れてはならないと思う。

また別の流れとして、横浜ポートシアターの活動とオルタナティブアーツスペースモノレール大船駅を看過できない。言うまでもなく元町商店街裏手の中村川に浮ぶ船の劇場、横浜ポートシアターは、横浜を本拠地に活動する市内唯一のプロ劇団である。また、オルタナティブアーツスペースモノレール大船駅は、使用されていないモノレール大船駅を四人のアーティストがオーナーから管理を委託され、自分達の制作場とイベントスペースとして利用しているユニークな場所である。

このように、横浜にもいくつかオルタナテ

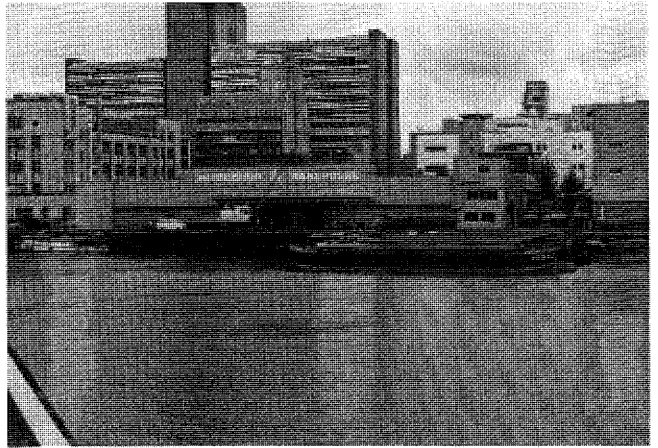
ィブスペースが存在するし、また新たなロフトを作ろうという動きがあることも事実である。ただ、冒頭にも述べたように、横浜の都市イメージからして、ウォーターフロント系ロフトの開発こそ、先端的文化・芸術の情報発信機能をもつ国際文化都市づくりの必須条件ではないかと思う。

五——ヨコハマ・フラッシュ準備段階

こういった経緯を踏まえて、ヨコハマ・フラッシュを振り返ってみる。前述のように、事の起こりは、一宮氏が三菱倉庫との間で倉庫使用についての合意を得てきたことだ。今年三月いっばいをもって三菱倉庫横浜支店海岸通り営業所を閉鎖、倉庫を解体・撤去し、跡地は県に売却、譲り受けた県はそこに県警本部（二十階建）を建設するということになった。そこで一宮氏と三菱倉庫との間で、三月一ヵ月間程度であれば、倉庫を使用して何かイベントをやってもらってもいいということになり、その話は教育委員会文化事業課へ持ち込まれた（一宮氏は、文化事業課の演劇鑑賞会の実行委員長として同課と関係していた）。

文化事業課としても、従来の演劇鑑賞会の延長線上に位置づけることで、何とか横浜でロフ

写真-2 三菱倉庫（新港ふ頭より）



トイベントを開こうと考え、早速実行委員会準備会を開いた。これまで文化事業課の事業に参加した人、市役所内部の有志、演劇実行委員会のメンバー等呼びかけて始めたミーティングは、昭和六十二年六月から十二月まで八回程度開かれた。ミーティングに参加したのは、延三〇人位。みんなこのプロジェクトへの熱い想いを述べた。しかし、これを実現するためにまず解決しなければならないのが資金の問題だった。市の予算はゼロ（年度途中で持ち込まれた企画

のため）。文化事業課の演劇鑑賞会の予算から若干充当しようということにはしたものの、総事業予算六五〇〇万円に対しては「焼け石に水」。そこで、実行委員会準備会のメンバーは各自企業に話をもちかけた。当然、全くのシロウトが、企画も決らないうちから企業協賛をとりに歩くといった無謀な試みに協賛が得られるはずもなかった。ところが、われわれのメンバーの一人が、前述のギャラリー上田ウエアハウスの経営母体であるウエダカルチャープロジェクト（UCP）に話をもちかけたこと、UCPはさっそく、西武セゾングループに話をし、協賛してもいいとの返答が返ってきた。

このような経緯で、メインスポンサー西武セゾングループ、企画・制作はUCPという基本図式が出来上がった。さらにキンビールがスポンサーに加わり、これ以後実際のイベントの準備に入る。この間、いくつかの要因があって、実行委員会準備会のメンバーは、これ以後数人を除いてこのプロジェクトから離れていった（一宮氏も含む）。残った人たちは、UCPと一体となり準備体制を整えていった。一月からは教育文化センター内に実行委員会の事務局を設置し、専従スタッフの常駐体制を確立した。年明け早々から、マスコミの反応は異常といえるほどで、事前のパブリシティとしては申し

分ないものだった。そのおかげで取材が取材を呼び、イベント情報が事前に各方面に浸透していった。

六——ヨコハマ・フラッシュ・オープン

まだ肌寒さの残る三月十一日、海岸通りに面した三菱倉庫の「開かずの扉」が開かれた。白く塗られた厚さ三〇センチメートルの鉄の扉は、昭和初頭に建設された堅固な構造建築物のせまりくる終末の予感を感じさせる。鉄扉をくぐる

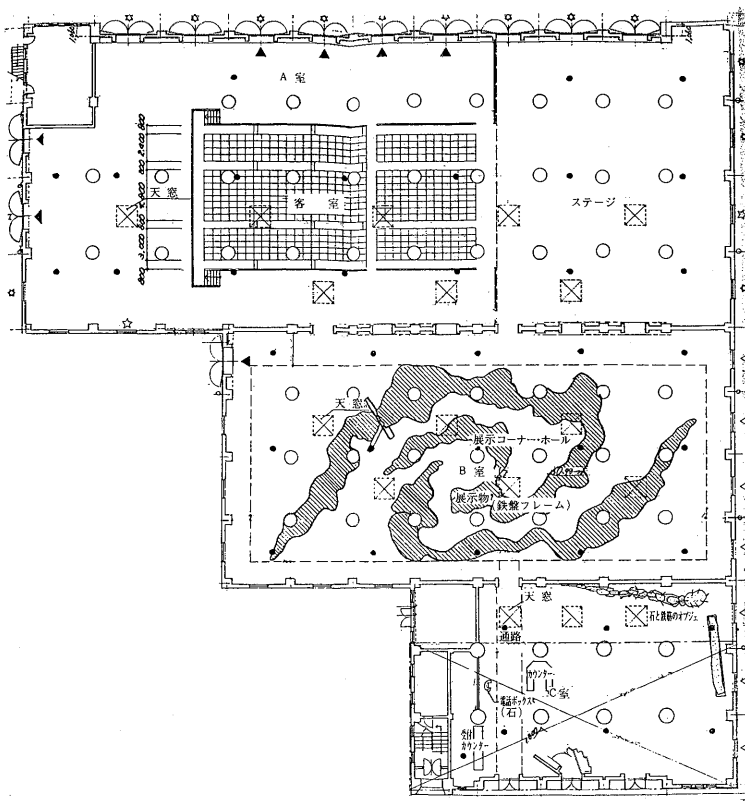
写真-3 パブスペース





と天井の高い不思議な空間が眼前に広がる。海岸通りに面したCスペースはパブスペース。ここは岡本敦生と竹田康宏二人の造形作家が石と木を用いて空間構成したパブ・ライブスペース。キリンビール（ハートランドビール）の協賛、ステージでは毎日横浜にゆかりの深いポピュラー、クラシック、ジャズミュージシャンたちによる無料コンサートが開かれた（ヨコハマプ

図-1 三菱倉庫平面図



レゼンツ)。このCスペースは居残った実行委員会準備会のメンバーが、企画の段階から全て取り仕切ったコーナーだ。
次のBスペースは、韓国の現代美術作家崔在銀の巨大オブジェのインスタレーションによる迷路となった。日曜日などは、テレビニュースで知った子供たちが、迷路の中を走り回ったり、子供たちに人気のコーナーだったようだ。

最も奥まったAスペースは一八六二㎡という広い空間だが、ここはイベントスペース。ヨコハマフラッシュの目玉イベントが連日このコーナーで開催された。ここでの催しを次に列挙する。
①セシル・テイラー・ソロコンサート
三月十一日オープニングパーティーのアトラクションとして開かれた、山下洋輔に影響を与えたフリージャズピアニストの第一人者セシル・テイラーのソロコンサート。
セシルは自分自身ニューヨークのロフトに生活しており、この日のコンサートの魅力とマッチしたすばらしいものとなった。ただ、残念なのは、

クッションとして開かれた、山下洋輔に影響を与えたフリージャズピアニストの第一人者セシル・テイラーのソロコンサート。
セシルは自分自身ニューヨークのロフトに生活しており、この日のコンサートの魅力とマッチしたすばらしいものとなった。ただ、残念なのは、

無料コンサートということと、セシルの音楽が前衛的なものだという理由で、演奏途中に半分ぐらの客が帰ってしまったこと、そのことが演奏への集中をさまたげたことである。

② IONESQUA #1

クラシック畑から出てきて、現在超ジャンルの活動をこなす気鋭の美人パーカッショニスト高田みどり。雅楽で使用される笙をみごとに現代に再生させた、横浜出身でやはり美人の宮田まゆみ。イエローマジックオーケストラ出身の細野晴臣。この異色の三人の音の出会いをねらったコンサートだった。

③ 勅使川原三郎・山口小夜子「サブロ・フラグメント」

現代創作舞踊の一方の旗手勅使川原三郎と横浜出身の世界的モデル山口小夜子のコラボレーション。ポスト舞踏の本命と目される勅使川原は、既に若い女性層を中心にかなりの固定客を確保しており、今回もチケットのはけ方は早かった。六mおきに円柱のあるこの倉庫内部空間を生かした勅使川原の踊りは見る者を魅了した。

④ SCOT「王妃クリテムネストラ」

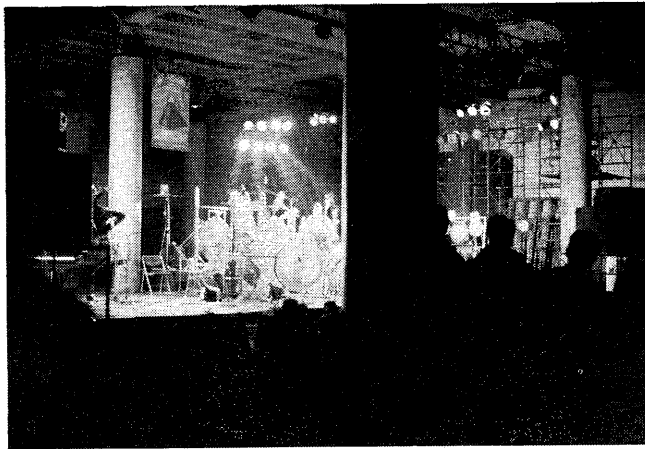
世界的に活躍する演出家、鈴木忠志の率いる

SCOTが演じる、ギリシャ悲劇をベースに構成された演劇公演。悲劇の主人公クリテムネストラ役の白石かずこのよく通る声が、コンサート空間の中に反響し、こだました。

⑤ アート・アンサンブル・オブ・シカゴ十山下洋輔

イベントの「とり」は、フリージャズ界のナンバーワンアート・アンサンブル・オブ・シカゴと山下洋輔のジョイントコンサート。シカ

写真-5 アートアンサンブル・オブ・シカゴ(イベントスペース)

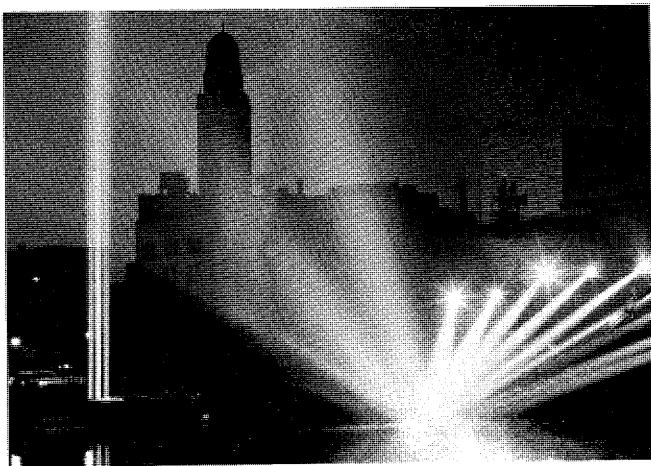


ゴはヨコハマフラッシュのためにだけ来日するという、ぜいたくなプログラムである。音楽的レベルを保ちつつ、ビジュアルなステージ構成を行うシカゴのステージには、やはり黒人の知性がにじみ出ているようだ。

⑥ 光のモニュメント

Aスペースから外に出ると前面には運河がある。この運河に巨大な鏡を浮かべ、倉庫屋上から強力なサーチライトをこの鏡へ当て、反射光

写真-6 光のモニュメント(撮影田原桂一)



を赤れんが倉庫の方へとばし、一方、運河上のはしけから夜空へ垂直に光束を投射するというプロジェクトを実施したのが、写真家であり、ライトアーティストである田原桂一。この強力な光の作品が、今回のイベントのシンボルとなり、来場者にとっては道しるべとなった（フラッシュ）。

⑦ 三月二十五日イエスデー

一年後の三月二十五日はY.E.S.'89のオープニングの日にあたるため、博覧会協会の協賛で子供のためのプログラムを組んだ。「インク」のプロデュースによるパフォーマンス「子供感覚」と、児玉博之プロデュースによる光のイベントが行われた。この日だけは、事前に申込んでいた子供とその保護者が、倉庫をおとずれ、イベントを楽しんだ。博覧会の事前PRとして十分功を奏したようだ。

七 ヨコハマ・フラッシュの反響

先に述べたように、このイベントに対しては、かなり前からマスコミのアプローチがあったし、開催期間中のテレビ、新聞、雑誌、ラジオ等の取り扱いは想像以上のものであった（例えば朝日新聞の場合、五回記事になり、全て写真入

りの扱い）。

このように、マスコミが大きく報道したため、音楽・美術・演劇ファンといった限られた人だけでなく、一般の市民も「テレビでやっていただけのヨコハマの倉庫に行ってみよう」「迷路で遊びたい」「光のショーを見に行こう」といった動機で実際に会場を訪れた。

このように、アートイベントとして開かれたヨコハマフラッシュだったが、光のモニュメント、アートメイズ、イエスデーなどにより子供達が多く来てくれたことは一つの成果として評価したい。一般的に文化イベントの場合、観客は年齢的に限られてしまうが、今回は、入場無料（コンサート等は有料）ということもあって日曜日などは親子連れが多く来場し、幅広い年齢層の参加が実現できたことは、この催しが単に文化イベントという次元にとどまらず、もっと広い意味を持つことを示している。この場所が、これまで休日には通りすぎるだけだった海岸通りが、一時的にせよ出現した観光スポットにもなったのである。つまり、ヨコハマフラッシュの会場となった海岸通りの三菱倉庫は、三月十一日から二十七日までの一七日間、ハマのウォータフロントに出現したオアシスとして機能したのだ。人は水辺を求めて、夜は空に立つ光の柱を求めて会場に「なんとなく」集まった。

この会場二場の持つ吸引力が働いたため、会期中の入場者数が七万人（実行委員会の推定数字）にもなったのである。

八 ロフト文化の未来

この現象は、これからのまちづくりのなかで一つのヒントになるのではないだろうか。来場者の多くは、倉庫内部に入るのは初めてだろうから、まず、その建築物の内部空間の大きさとその不思議な雰囲気、日頃感じたことのない「何か」を感じたはずだ。この言葉にならない「何か」を感じさせる場をここでは非日常空間と呼んでおこう。この非日常空間をまちづくりにうまくとり込むことが、まちの賑いを演出するうえで重要なポイントのように思える。

非日常空間は、新建築物にも生じるし、既存の建物、施設にも存在するが、ロフト文化といった場合、既存の建物、施設の方こそ非日常空間を有するということになる。なぜなら、新しい建築物の場合、建築時の使用目的と実際の使用目的が当然のことだが一致していること（例えば、劇場を作った劇を上演する）、その空間に固有の「時間の蓄積」がないため、非日常空間といっても、人工的空間に過ぎない。一方、既存のものは、本来の目的を持っており

(持っていた)、われわれはそれを別の目的で使用しようとするのであり—オルタナティブスペース—、その際、そこに蓄積された時間を意識させられてしまうのだ。三菱倉庫は指定綿花倉庫として、六十年にわたってインド等から輸入された綿を保存し続けた場所であり、倉庫で働く人たちがフォークリフトに乗って作業していた場所なのだ。そこを使って芝居をやる場合、劇自体がその空間の「時間」に引きずられてしまうのだ。今回のイベントにもそうした部分はあったようだ。空間の持つこの固有の力が非日常空間の所以である。

ところで非日常空間を追求すると、既存の建物、施設の目的外使用となるが、その場合、建築基準法によると、建築物の用途変更手続きを必要とする(一時的使用の場合は、仮設興業場としてとりあつかうことも可能)。その他、消防、警察等いくつもの許認可事項をクリアする必要がある。ヨコハマフラッシュの場合、関係官庁としては、市内部では、建築局、中消防署、港湾局、中保健所、外部では、加賀町署、水上署、運輸省東京航空局、横浜税関、海上保安庁があり、それぞれ個別に折衝を行った。ただ、今回このイベントが可能だったのも、市内部の

建築、港湾、消防等許認可権をもつ部局の人たちが、事前に会合を持ち、基調としてやらせる方向で検討してくれたことが決定的要因だったと思う。市が主催する、一時的使用である、イベント終了後とり壊される建物である等の理由も幸いした。

しかし、ひるがえってみれば、恒常的にオルタナティブスペースとして使用するととなると、こうはいかないだろう。現行の法体系の中では目的外使用など想定されていないのだから、これはどうしても最初から無理があるのだ。ところが、前述のように本来ロフト文化というのは、一時的イベントのことではなく、日常的にロフトで活動している状態を指しているわけだから、この様な場所が横浜に生まれ、定着してこそ、横浜にロフト文化が生れたといえるわけだ。今回のイベントは、いわばそのための「予習」であつたのだ。東京では、竹芝の倉庫街、佐賀町エキジビッドスペース等はロフト文化として「定着している」。これらも行政サイド(都・区)は黙認しているというのが実態らしい。オルタナティブスペースについては、現行法体系内で想定されていないので、許認可の規範を従来の枠で考えざるを得ない。そうすると、恒

常的ロフトスペースは不可能あるいは法令をクリアするため莫大なコストを強いられることとなる。さらに許認可を得ようとすれば、たいへんな努力とエネルギーを必要とする。

したがって、行政サイドとしては、現行法上可能な範囲で、従来の規範にとらわれず、この新しい文化的チャレンジをバックアップしようという姿勢が何より大事である。民間が「事実先行型」で行っている活動を黙認という形で無視し続けるのではなく、このような新しい動向を行政として積極的に受けとめ、施策に反映させていくという大胆な姿勢こそ、現在、何より必要なことだと思う。横浜のウォーターフロントにロフトゾーンが出現すれば、その文化・情報の先端性により完全に東京を陵駕する部分が生まれるのは間違いない。

一七日間で消えてしまった空へ向う光が、再び横浜のウォーターフロントに出現し、ハマのランドマークとして一年じゅう夜空を照らす中、ロフトゾーンは夜になっても人の波が絶えない—そんなヨコハマも夢ではないのだ。

〈教育委員会文化事業課〉